

墨田区北斎館(仮称)基本設計プロポーザル

①北斎をテーマとした美術館の設計理念

北斎とは「理知、軽ろみ、そして謎」

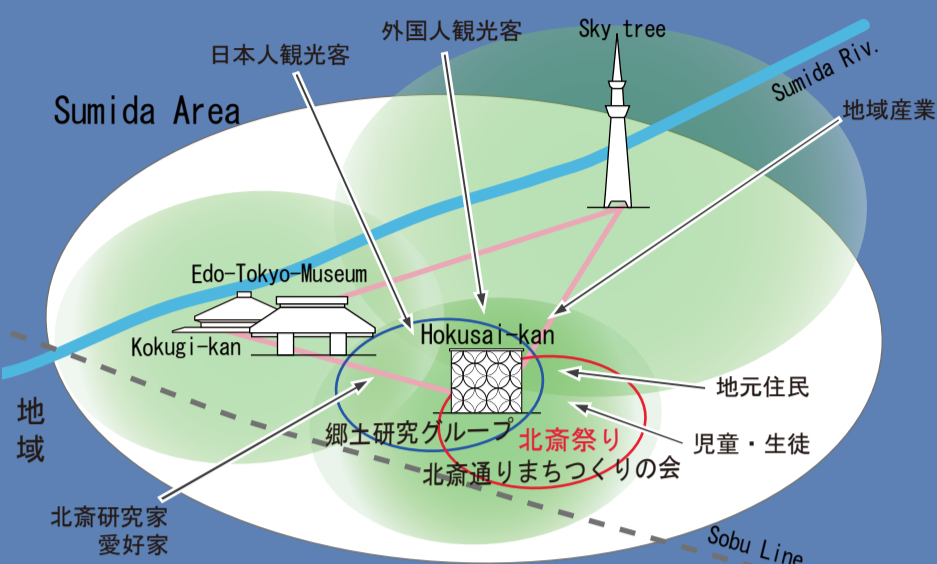
北斎はその長い生涯に多岐に渡るモチーフを扱った。多視点、平面性の中に見いだす奥行きと重層性など多様な描写手法を駆使した表現技術の高さ、大胆な構図、それら追隨を許さぬ独自性によって、世界から歴史的表現者として高く位置付けられている。作品を愛した人々は階級を問わず、価値の高い美術品として扱われると同時に庶民的な日常生活と一体となって愛され、鑑賞するものの視座にまかされた様々な発見と謎解きを孕んで長く愛された。この多様な受け止めを許容する作品の在り方に着目する。その独自性を建築的に解釈し、再構成された空間の体験を、新しい意味の発見と謎解きに満ちたものとする事が、北斎館の主題と考える。

展示室は、様々なコーナーを形成する壁面の展開が北斎のモチーフの多様性に呼応し、空間と一体となって見るものに多彩な体験を呼び覚ます空間とする。

また、設計ワークショップの開催によって、地域住民との協議、調整をスムーズに行うことが不可欠であるとする。

②観光・産業を含む地域活性化拠点としての設計理念

両国国技館と江戸東京博物館、新設のスカイツリーそして北斎館、これらによるトライアングルが形成されている。周辺に点在する歴史的遺構とともにこれらをつなぐ街路環境の差別化が重要な要素である。この領域中に葛飾職人仕事の希少な産業（ガラス工芸、指物業、など）が含まれ独自性を発揮する要素となる。



③墨田区北斎館(仮称) 施設整備方針における4つの「建築基本方針」を実現するための提案

1) まちに親しまれるランドマークづくり

周囲に開けた計画地は、視認性の高い環境である。計画建物は高さを誇るスケールではなく、規模も小さい。また、周辺の建物はソリッドで重塊性が高く重いものである。以上の事から計画建物は、明確な形態と輪郭の明晰さ、高い透視性が周辺の建物との対比性を明らかにする。又重要な点は人々に語りかける親しみ易さこそ精神的ランドマーク、象徴性を備える事と考える。上記の考察から本計画の外郭のイメージは、「葛飾伝統ガラス工芸である江戸切子」の持つ繊細さ、清冽さ、を根拠としている。

2) 誰にもやさしい空間づくり

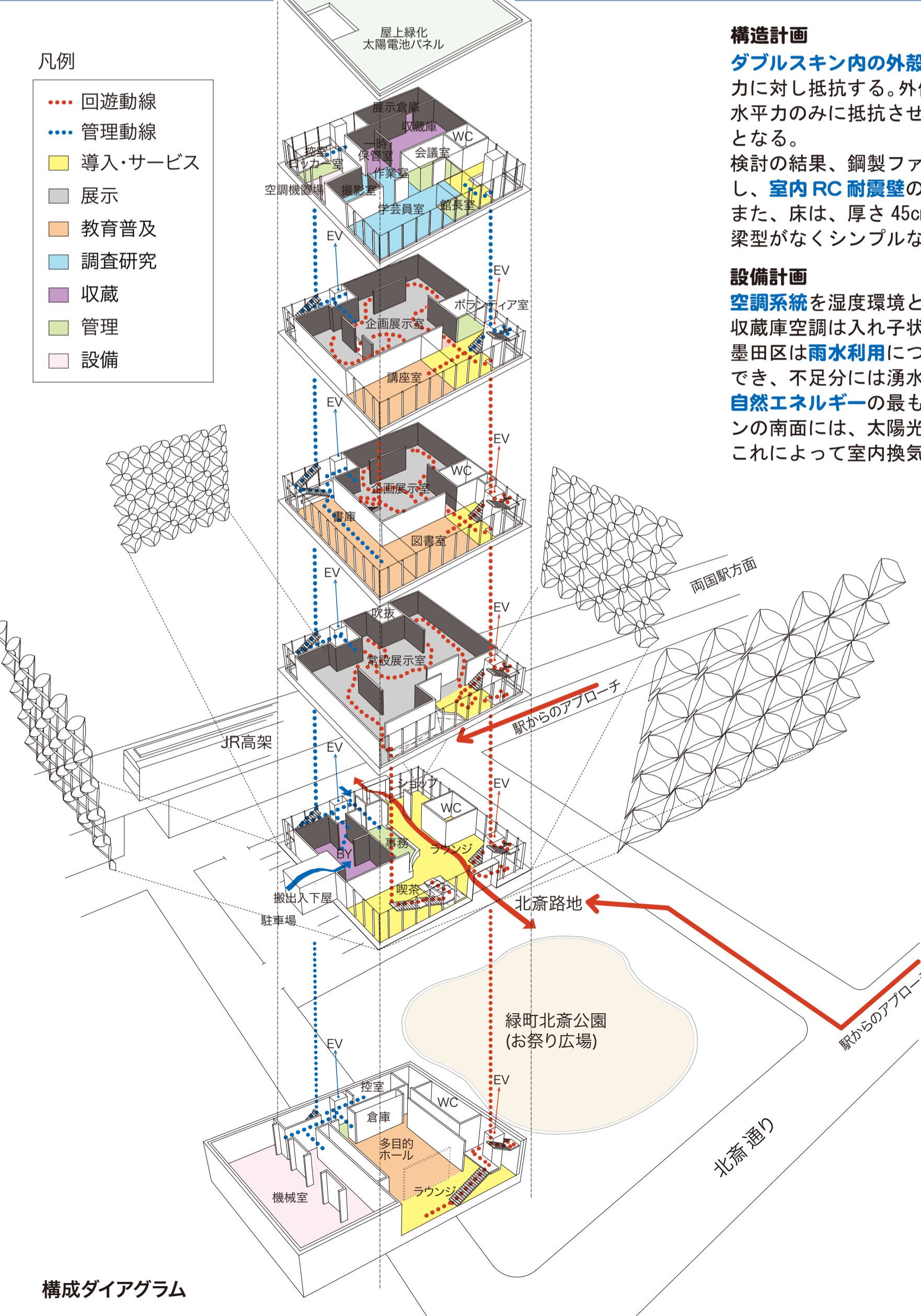
施設の構成が解り易い事がやさしさを生み出す。展示関係、収蔵関係、撮影室、管理関係の一部を閉じた空間とし、その他を徹底して開かれた施設とし、相互関係が解り易いものとする。人々の目的的空間への指向性を明らかにする事はユニバーサルで、バリアフリーな事となる。又、回遊性を持ちながら一筆書きではなく自由な選択による順路を可能にする。

3) 資料にやさしい空間づくり

資料、作品は和紙が用いられ、劣化が激しいと言われる。その為、展示室、収蔵庫、の温湿度の管理が重要と考える。それには多くのエネルギーを用いることになり、合理化が必要になる。一方地球環境対応はグローバルな必須事項であり、資料にやさしいと言う事と環境にやさしいと言う事は表裏一体のものとして捉えている。

4) 環境にやさしい空間づくり

環境内で違和感のない、楽しんで、軽快な建築である事、サステナブルでエネルギーを浪費しない空間こそが環境にやさしいと考え、設備的に空調熱環境をコントロールする事を重視する。構造体であると同時に日照調節機能を備え、熱環境調整の為のダブルスキン・ファサードとする。敷地の地下水位が高い事に着目し、地下熱利用の空調システムとする。また、建設時のCO2削減の観点から、軽量化を目指す。(工場制作重視の躯体で現場作業の削減。)

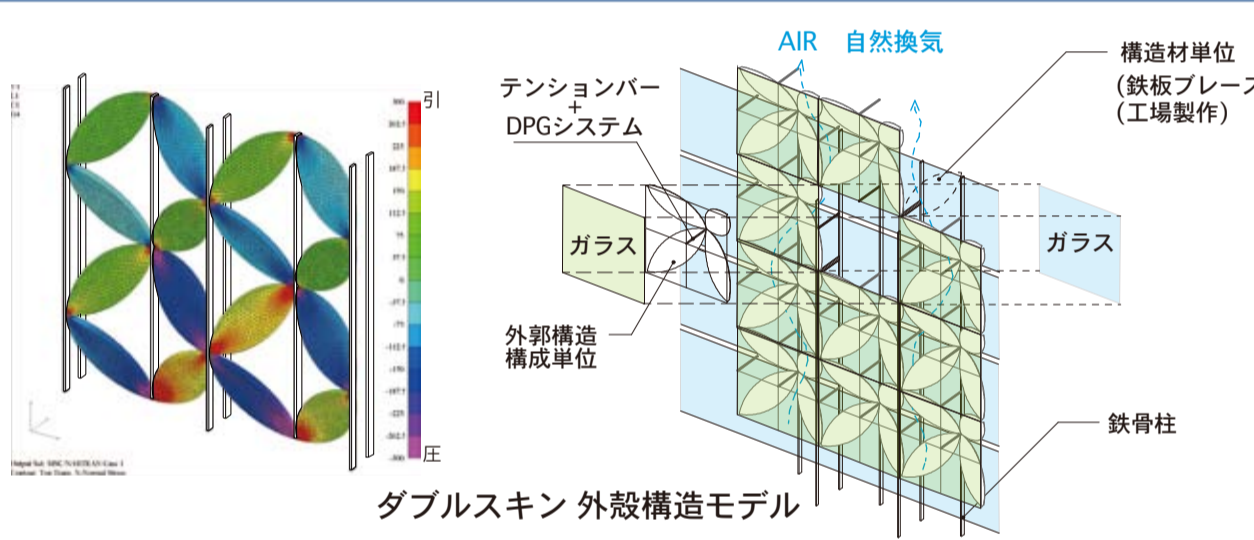


構造計画

ダブルスキン内の外殻構造は、内側の鉄骨柱のみ鉛直力に対し抵抗する。外側の鉄骨柱、鋼製のファサードは、水平力のみ抵抗させることにより、耐火被覆は不要となる。検討の結果、鋼製ファサードが地震力の約1/3を負担し、室内RC耐震壁の負担を軽減している。また、床は、厚さ45cm程度のスラブを採用し、柱型、梁型がなくシンプルな空間となる。

設備計画

空調システムを湿度環境と利用形態から3系統として、展示系統、収蔵庫系統、管理系統とする。特に展示室と展示ケースでの空調と収蔵庫空調は入れ子状態とし内部の空調を極力せず、周囲空間の空調で負荷を取り除く工夫をすることで作品の保護をする。墨田区は雨水利用については長い歴史がある。北斎館でも、中水として利用する。屋上がスッキリしているため雨水を有効に集水でき、不足分には湧水も補給水として加えることで有効利用範囲を広げている。自然エネルギーの最も安定している地中熱を空調熱源に利用して地中熱ヒートポンプを採用し成績係数COPを上げる。ダブルスキンの南面には、太陽光発電セルを取り付け館内電気として系統連係し有効利用する。ダブルスキン内の気流も自然エネルギーで、これによって室内換気動力を軽減する。



④その他提案に際して留意した事項

「生涯学習の場として」

多目的ホール、講座室などが多様な人々に利用されることから相互に関係を広げる場となり、「スミダ」を深め、それをもって国際的な広がりを持つ施設となる事ができると考える。すなわち、多視点の交差等、浮世絵作品を通じた「見慣れた風景のイノベーション」を実現し、まちづくりに新風を巻き起こすと考えます。来訪者は、「美術館：一般・外国人」「教育機関：児童・学生」「研究機関：研究者など」に整理され、夫々の領域が重なり、交流することで革新的な視点を得て、改革の可能性が生まれる。さらに北斎に学ぶ重層性、構成力は来訪者・活動団体等の意思と活動内容に、イノベーションを生み、地域の楽しさの源となるクリエイティブな人材を生み出す。

「周辺環境や立地背景を活かす」

緑町公園は機能を充足しながら北斎館と一体となったお祭りの広場となりうる、江戸文化の継承に繋がる活動を受け入れる空間として再構成する。「施設のイニシャル・コスト及びランニング・コストの抑制」単純な構成と設備負荷の軽減。自然とともにある建築的要素(緑、日陰、通風、パッシブ・ソーラー)がランニング・コストの削減に繋がる。

「施設建設の工期短縮」

工場制作の躯体と鉄骨造のファサード軽量化による杭基礎の本数の削減。2次仕上を削減し、質実な躯体と簡潔な仕上

